日本中國學會報　第五十五集

『板橋雜記』成立小考

――晩年の余懷の交遊關係を中心に――

小塚由博

はじめに
一、余懷の半生及び著作
二、晩年の交遊關係
三、余懷と孔尚任――『板橋雜記』と『桃花扇』の相互影響――
おわりに

はじめに

明末清初の文人余懷（一六一六～一六九六）は一生を通じて多くの文人たちと交遊し、詩・詞・文章・小說・戲曲など多數の著作を著したが、その最高傑作が隨筆『板橋雜記』であるといわれている。『板橋雜記』は余懷が自身の青年時代の見聞を基に、明末南京の遊郭と妓女、そしてそこに出入りしていた文人たちを描いた作品であり、當時の社會風俗や、文人たちの活動について記した作品として、今日まで日・中ともによく讀まれてきた。[1] にもかかわらず作者余懷については、今日に至るまであまり研究されていない。彼の半生にはまだまだ不明な點が多いが、特に『板橋雜記』を著したとされる晩年の動向については殆ど研究されておらず、『板橋雜記』制作の動機や成立などについては、詳しくは依然として不明なままである。

これまで『板橋雜記』は、冒襄の『影梅庵憶語』や張岱の『陶庵夢憶』などとともに、追憶、懷古もしくは懺悔といったものをそのテーマとし、明の遺民文學の一つとしてとらえられてきた。[2] むろんそれは大きな視點から見れば、間違ってはいないだろうが、その根據となるべき余懷に關する詳細な調査が缺如している。これまで余懷研究があまり進まなかった原因は、第一に余懷に關する資料があまりにも廣範圍で雜多なため、それを收集・整理するのに勞を要するということ、第二に余懷の作品中、詩詞に關してはかなりの量の作品が殘っているが、文章に關しては、序文などを除いて彼の文學や思想、動向などについて記したものがほとんどない、ということが考えられる。日本では一九六四年に前田愛氏が成島柳北（一八三七～一八八四）の作品『柳橋新誌』と『板橋雜記』を比較し、[3] また岩城秀夫氏が『板橋雜記』を翻譯して以來、[4] 殆ど研究されていない。[5] 最近では、中國で少しずつ研究が行われており、[6] 『板橋雜記』以外の彼の作品についても、注目されるようになってきてはいるものの、まだまだ十分とはいえる狀況ではない。

筆者は、これまで余懷の半生について、その動向や交遊關係を中心として調査してきた。[7] とりわけ、『板橋雜記』が完成した晩年に關し

て、その具體的な成立や動機を含めて、關心をよせてきた。本論では、その解明の手がかりとして、余懷の晩年の動向について論じ、とりわけ余懷の交遊關係全般について考察してみたい。[8]

一、余懷の半生及び著作

ところで、八〇餘年の歳月を生きた余懷にとって晩年とは何年以降を指すのか。これについてはっきりと分けるのは難しい。例えば、年齢から幼年期、青年期、壯年期、晩年期という四つに分けるとすれば、大體五、六〇歳前後をその境界と見なすことができるだろう。

余懷の半生について、資料不足もあってか年譜も存在しておらず、これまであまり詳細に述べられることはなかった。それは資料の量的な不足ではなく、具體的な內容の不足であり、余懷に關する記述は、多くの傳記資料にみることができる反面、詳細な事實が殆ど記されていない。今回は紙數の關係から詳しくは述べられないが、余懷の作品群や他の文人たちの資料などから、晩年に到るまでの余懷の半生や著作について簡單にみておきたい。

(一) 青年期—南京寓居期—

余懷、字は澹（淡）心、又は無懷。曼（鬘）翁・曼（鬘）持老人・玉琴齋・味外軒・廣協・廣霞山人・寒鐵などと號した。萬曆四四年（一六一六）に生まれ、康熙三五年（一六九六）に死去した。[9] 享年八〇。出身は福建省莆田縣黃石鎭水南村といわれている。[10] ここで問題となるのは、余懷の傳記中の記載が斷片的で、內容的に乏しいということである。余懷の傳は『淸史列傳』や『國朝耆獻類徵初編』、『福建通紀』などに見ることが出來るが、彼の出自については全く記述がない。福建莆田の余氏といえば、豪商として有名な一族が存在するが、それに連なる人物かどうかは不明である。ただ、余懷の父は商人であったという說も存在する。[11] いずれにせよ、余懷の家系について明確な記述が存在しないことから、名門の家柄、もしくは嫡流ではなかったと考えられる。

それでも彼は縣の秀才となった後南京へ移り住んだ。その時期は詳しくはわからないが、崇禎一二年（一六三九）頃から復社の人物、例えば冒襄（一六一一～一六九三）、方以智（一六一一～一六七一）等との交遊の記錄があることから、この時までには移住していたのであろう。崇禎一四年（一六四一）頃、當時南京大司馬であった東林派の范景文（一五八七～一六四四）の幕客となった。主にこの間の事を記したのが『板橋雜記』であり、この頃正に南京秦淮の遊郭に出入りしていたであろう。だが、翌年秋、彼は鄉試に落第し、そのショックからか病氣に罹り棲霞山に隱棲してしまう。この隱棲生活がいつまで續いたのかわからないが、崇禎一六年（一六四三）の三月には、鴛湖（嘉興）に旅行していることから、この時には回復していたと思われる。

(二) 甲申の變から蘇州への轉居前後

一六四四年は所謂甲申の變が起こった年であった。余懷が旅行をしている三月に北京が李自成によって陷落し、崇禎帝が崩御した。五月一日、余懷はこの事實を知り、南京を出發して杭州方面へ向かった。數カ月後南京へ戻った余懷は、復社の社友たちと行動を共にしていたようである。[12] だが、馬士英、阮大鋮による東林、復社派への肅正が始まると命からがら脫出した。そしてその後一六四五年に淸軍によって南京が陷落して以後數年間の記錄は存在しない。黃裳氏は、余懷は復社の殘黨とともに反淸運動に參加したというが、確かな證據は存在し

ない。[13] 一六五〇年前後になると、『五湖游稿』（詩集）や『三吳遊覽志』（日記）などの記述から蘇州・吳興・婁東・松江などを轉々とし、吳偉業、姜垓、葉襄、張一鵠等と交遊していることがわかる。

余懷が再び南京に腰を落ち着けたのは一六五〇年代後半のことで、龔鼎孳、紀映鐘、趙友沂、杜濬等と盛んに交遊し、詩を唱和している。[14] 『莆田縣志』によると、一六六〇年に余懷は蘇州へ轉居する。[15] その翌年、明王朝は事實上滅亡するが、奇しくもこの年に余懷は『詠懷古跡』を作っている。これは全二九首の詩集だが、その何首かを王士禎（一六三四～一七一一）に贈っており、王士禎はこれらの詩を賞贊し、「晩唐の詩人劉禹錫にひけをとらない」と評した。[16] さらに同年、清初の六大畫家の一人、吳歷と旅行し、彼の詩集『墨井詩鈔』に序文を作っている。なお、余懷は同じく六大畫家である王時敏、王暈、惲格等とも交遊があった。[17]

（三）著作

『板橋雜記』以外にも、余懷の作品は多い。詩は五〇〇首以上、詞は二〇〇首以上存在し、この外筆記が二〇種以上、戲曲三種（現存せず）、文言小說一種などがあった。大まかに言って、前半生の著作は詩詞が多く、後半生になるにつれ筆記が多くなる。

余懷の著作については蔣維錟氏の調査があるが、[18] 若干の不備も存在する。ここでは以下に作品名のみ記すことにし、詳細は別の機會に論ずることとしたい。

○詩

『甲申集』七卷、『五湖游稿』五卷（內卷四、卷五缺）、『楓江酒船詩』一卷、『西陵唱和集』殘卷、『詠懷古跡』一卷、『戊申看花詩』一卷、『七歌』一卷、『平生蕭瑟詩』、『彈指倡和』、『味外軒詩輯』抄本、『梅花詩』（未傳）、

○詞

『玉琴齋詞』一卷、『秋雪詞』一卷、『研山詞』一卷、

○筆記・隨筆

『板橋雜記』一卷又三卷、『三吳遊覽志』一卷、『東山談苑』八卷、『四蓮華齋雜錄』八卷、『硯林』一卷、『茶史輔』一卷、『宮閨小名後錄』、『嘉山紀游』、『余子說史』八卷、『婦人鞋韈考（辯）』、（以下未傳）『研山草堂集』、『黨鑑』、『盈鑑』、『不妄語述』、『曼翁漫錄』、『禪林漫錄』、『讀史浮白集』、『古今書字辨訛』、『秋雪叢談』、『金陵野抄』、『余子說詩』、『汗青餘語』、

○戲曲（何れも未傳）

『集翠裘傳奇』、『鴛鴦湖傳奇』、『封髮記傳奇』、

○文言小說

『王翠翹傳』一卷。

なお、これらの作品をまとめた總集として、『味外軒集（稿）』『江山集』『曼翁文集』があったが、現在僅かに殘本があるのみである。

二、晩年の交遊關係

この節では、晩年の余懷の交遊關係について述べることとする。晩年の余懷について、『清史列傳』卷七〇・文苑傳では「晩は吳門に隱居し、支硎、靈巖の間に徜徉す。徵歌選曲、少年の如き有り。年八十餘」としか記述していない。[19] また、『國朝耆獻類徵初編』等、別の傳記資料[20]もこれとほぼ同じであり、余懷の晩年に關する記述は殆どない。

さて、余懷の晩年で交遊關係のあった主な人物としては、李漁（一六一一～一六八〇）、冒襄、張潮（一六五〇～一七〇九）、尤侗（一六

一八〜一七〇四）等が擧げられる。李漁は特に戯曲方面で當時の文壇の一翼を擔っていた人物であり、廣範圍に渡る文人達と面識があった。冒襄は余懐と同年代の人物であり、青年時代をともに過ごした閒柄でもある。張潮は後述の通り清初の有名な作品收集家であり、余懐の作品を多く彼自身の編集する叢書に收錄しており、余懐の作品の傳播という點で最も功績のあった人物の一人である。また、尤侗は余懐が死ぬまで交遊があり、余懐をよく知る人物の一人であり、また余懐の息子たちとも交遊關係があった。しかし、彼らとの關係を示す資料は少なく、その全體像をとらえるにはなお資料不足であり、また紙數の都合もあってその全容を論じるまでにはいかないが、本節では彼らを中心に、余懐の晩年の交遊關係について考察していきたい。(21)

（一）冒襄

一六七〇年代になると、李漁との交遊以外は余懐の交遊關係を示す資料が少なくなる。

一六七七年冬、余懐はかつての友人であった冒襄と再會する。冒襄、字は辟疆、號は巢民。雉皐の人。青年時代を南京で過ごし、復社の一員として活動した。方以智、侯方域、陳貞慧等とともに復社の四公子と呼ばれ、余懐以上に風流才子としての名を殘した人物である。後にその側室董小宛の死を悼み隨筆『影梅庵憶語』を著したが、余懐は董小宛とも面識があった。

余懐はその後數年にわたって冒襄と交遊している。その様子は冒襄の『同人集』に見ることができ、余懐は二十數首の詩と二篇の序文を作っている。再會した時の様子を「冒巢民先生七十壽序」（卷二）で以下のように述べている。

丁巳之冬、雉皐冒先生巢民來吳郡。余聞之驚喜過望、握手道故、若在夢中、又如隔世。巢民既髮種種、清癯善病。余亦頹然自放、憔悴行吟、風流文采、非復曩時。

丁巳の冬、雉皐の冒先生巢民吳郡より來たる。余之を聞きて驚喜望を過ぎ、手を握りて故きを道ふこと夢中に在るが若く、又隔世の如し。巢民既に髮種種、清癯にして善く病む。余も亦頹然として自ら放ち、憔悴行吟し、風流文采、復曩時に非ず。

＊丁巳―康熙一六（一六七七）年

冒襄との交遊を示す記錄は、一六八〇年以降は全く見ることが出來ない。これは恐らく冒襄が揚州へと移ったからであろう。だが、後述の通り、冒襄は余懐と孔尙任が交遊關係を結んだ可能性を考える上で重要な役割を果たすことになる。

（二）張潮

張潮といつ頃知り合ったかについて明確な資料はないが、恐らく一六八〇年代以降のことであろう。

張潮は清初を代表する文人であるが、特に小品文の收集家として大きな業績を殘している。彼はこの時期流行した小品文學作品の收集に盡力し、『虞初新誌』『檀几叢書』『昭代叢書』などの叢書を編纂した。彼は余懐の作品を叢書に收錄している。張潮が收錄した余懐の作品とそれを收錄する叢書は以下の通りである。

余懐の作品	收錄叢書
『板橋雜記』一卷	『虞初新誌』卷二〇
『板橋雜記』三卷	『昭代叢書』別集
『寄暢園聞歌記』一卷	『虞初新誌』卷四
『王翠翹傳』一卷	『虞初新誌』卷八
『婦人鞋韈考』一卷	『檀几叢書』初集卷三一

『茶史補』一卷　『昭代叢書』辛集
『硯林』一卷　『昭代叢書』甲集

このように、両者の關係は作者と編集者という關係であったが、その一方、余懐は張潮の作品に對する評者でもあった。それは、晩年張潮の作品である『幽夢影』に序文と評を付していることからもわかる。また、張潮は余懐の死後、『硯林』に跋文を書いている。

曼翁乙亥夏、以此帙手授于予。予獲之不啻拱璧、因載之叢書中。方授梓時、適友人自吳郵一緘來云、先生已于六月荷花誕日、棄硯長往。予聞之不勝人琴之歎。悲哉。悲哉。特不識含斂時、亦曾以佳硯爲殉否也。心齋居士題。

曼翁乙亥の夏、此の帙を以て手づから予に授く。予之を獲て啻だに璧を拱するのみならず、因りて之を叢書中に載す。方に授梓せし時、適々友人吳より一緘を郵し來りて云ふ、先生已に六月荷花誕日に于て、硯を棄てて長往す、と。予之を聞きて人琴の歎に勝へず。悲しきかな。悲しきかな。特だ含斂の時、亦曾て佳硯を以て殉と爲すや否やを識らず。心齋居士題す。

＊乙亥―康熙三四（一六九五）年

張潮との關係は、出版事情なども含めてまだまだ不明の部分が多い。今後、『板橋雜記』の版本を論ずる際の課題とし、本論ではここまでとしたい。

（三）尤侗

尤侗、字は展成といい、長洲（江蘇省吳縣）の人である。『清史稿』[22]の記述によると、若くして諸生に補せられ、永平の推官に敍せられた。康熙一八年（一六七九）に博學鴻詞科に擧げられ、檢討となり、後侍講となった。詩詞・文章ともに巧みで、戯曲家としても知られる。

余懐が尤侗と知り合った正確な時期については、詳しいことはわかっていない。だが彼は余懐の詞集『玉琴齋詞』に序文を記し（一六七一年）ており、また先述の通り同年には余懐とともに李漁と交遊し、ともに『閑情偶寄』のために序文を作っている。一六六四年から一六七一年ごろの詞を集めた『玉琴齋詞』中に、尤侗に關する詞が存在していることも考えると、余懐が尤侗と知り合ったのは、少なくとも六〇年代中頃ではないかと考えられる。更に尤侗は余懐の長子余賓碩（字は鴻客。？～一七二二）や次子余蘭碩（字は香祖。一六六五？～？）とも交遊があった。

尤侗とのその後の關係を示す資料は乏しいが、余懐が死去するまで付き合いがあったようである。その最も顯著な證據が「題板橋雜記」であろう。彼は前半部分で余懐から序文制作を依頼されたこと、『板橋雜記』が唐・孫棨の『北里志』などと同様に、滅び去った過去への追憶を主題とする作品であることを述べた上で、後半以下のように續けている。

或曰、曼翁少年、近于青樓薄幸。老來弄墨、興復不淺。子方洗心學道。何爲案頭着阿堵物。予笑曰、昔明道眼前有妓、心中無妓。伊川眼前無妓、心中有妓。以定二程優劣。今曼翁紙上有妓、而艮翁筆下故無妓也。何傷乎一序之。

或るひと曰く、曼翁少き年、青樓の薄幸に近づく。老來墨を弄べば、興復淺からず。子方に心を洗ひ道を學ぶ。何爲ぞ案頭に阿堵物を着けんや。予笑って曰く、昔明道は眼前に妓有るも心中に妓無し。伊川は眼前に妓無きも心中に妓有り。以て二程の優劣を定む。今曼翁は紙上に妓有るも、艮翁は筆下に故より妓無きなり。何ぞ一に之に序するに傷まんや。

＊青樓薄幸―遊郭にすむ妓女　＊艮翁―尤侗を指す

尤侗がこの文章を作ったのは、一六九五年であり、余懐の死の一年前である。[23] 余懐の方から依頼したことを考えると、『板橋雜記』が最終的に完成したのはこれより少し前であると考えられる。

尤侗は、余懐の作品の讀者であったと同時に、李漁や曹寅など、余懐の晩年の交遊關係形成に大きな影響を與えたと考えられる。

以上、冒襄、張潮、尤侗といった余懐の晩年に深い關係のある人物について考察してきた。しかし、これ以外にも斷片的な資料が多く、まだまだ調査の必要がある。これ以上のことはまた別の機會に述べるとして、次節では孔尙任との關係について述べたいと思う。

三、余懐と孔尙任
―『板橋雜記』と『桃花扇』の相互影響―

(一)『板橋雜記』と懐古

本節では、余懐と孔尙任との關係について考察していくが、その前に『板橋雜記』がいつ頃制作され、完成したか、ということについて簡單に説明しておく必要があるだろう。

余懐は「幽夢影序」に自らの著した雜著について述べているが、そこに『硯林』(一六八七年序)の名があって『板橋雜記』の名がない。また先述の通り尤侗「題板橋雜記」は一六九五年の作であり、このことから、『板橋雜記』は一六八七年から一六九五年の間に完成したと考えられる。しかし、李金堂氏も述べるように、『板橋雜記』は長い年月をかけて制作されたといわれている。そこで『板橋雜記』稿本の存在が想像できるが、その存在を示す物的證據は見られない。しかし內容的に見ると、『板橋雜記』の中心的テーマである懐古の情は、先述した『詠懐古跡』にすでに見ることが出來る。

『詠懐古跡』冒頭

金陵、六朝建都之地、山水風流、甲于天下。喪亂以來、多爲茂草。予以暇日、尋攬古跡、形諸歌詠、以備采風。然擧目河山、傷心第宅。華清如夢、江南可哀。其爲悱惻、可勝道哉。

金陵は六朝建都の地にして、山水風流、天下に甲たり。喪亂以來、多く茂草となる。予暇日を以て古跡を尋攬し、諸を歌詠に形はし、以て采風に備ふ。然れども目を河山に擧ぐれば、心を第宅に傷ましむ。華清夢の如く、江南哀むべし。其れ爲に悱惻し、道ふに勝ふべけんや。

これは、『板橋雜記』序文中の「金陵古稱佳麗之地、衣冠文物、盛於江南。文采風流、甲於海內」や、「鼎革以來、時移物換、十年舊夢、依約揚州、一片歡場、鞠爲茂草」といった文章の元となったものだと考えられる。

以上のように、一六六〇年代以降、余懐は懐古を自らの中心テーマの一つに置き、自らの感慨を懐古詩として表現しようとしていることがわかる。そして、この懐古というテーマの集大成ともいうべき作品が『板橋雜記』であり、表向き遊郭と妓女を描きながらその實自らの懐古の情を著しているといえる。しかしながら、いつこうした發想に至ったのか、ということについてはよくわからない。筆者は、『板橋雜記』に類似した作品が余懐の他の作品に見られないことを考えれば、これから述べる孔尙任との交流、とくに『板橋雜記』と同じ時代、同じ舞臺設定であるこの戲曲『桃花扇』から影響を受けたのではないか、と推測する。

（二）『板橋雜記』と『桃花扇』

孔尙任（一六四八～一七一八）の戯曲『桃花扇』は、復社と閹黨との政治鬪爭を中心に、明末南京の動亂を描いた作品であるが、その緻密な時代考證から後世歷史劇と稱されている。『桃花扇』及び作者孔尙任に關する研究は、これまで盛んに行われているが、思想的な方面からとらえる研究が多く、まだテキストや成立などに關する詳細な研究はあまり行われていないように思われる。以下述べる余懷と孔尙任との關係が、あわせて孔尙任研究の一資料になれば幸いである。

余懷と孔尙任との關係は、これまで吳新雷氏が指摘するように[24]、『板橋雜記』と『桃花扇』という、作品を通じた關係であった。『桃花扇』には、孔尙任自身が記した「考據」があり、それは『桃花扇』制作の參考資料リストとでもいうべきものである。そこには二〇種類の資料の名が擧げられており、さらに利用した箇所が割り注形式で記されている。その一つに余懷の『板橋雜記』がある。

余澹心板橋雜記十六條　長坂橋　秦淮燈船　舊院對貢院　舊院鄭女英字妥娘　董白死梅村哭詩　卞賽爲女道士　貴陽楊龍友　李香寇湄字白門　曲中狎客　中山公子徐靑君　丁繼之　柳敬亭　沈公憲　李貞麗　沈石田盒子會歌[25]

（筆者注―長板橋以下は割り注）

この文章から、余懷の『板橋雜記』が、孔尙任の『桃花扇』作製の資料にされたということがわかる。吳新雷氏は、冒襄や張怡等とともに、『桃花扇』制作に影響を與えた重要な人物の一人として余懷を擧げ、「余懷が秦淮の歌妓を記した『板橋雜記』は、孔尙任がその素材をくみ取った重要な作品であった」[26]と評している。むろんこれだけを見れば、單に『板橋雜記』が『桃花扇』に影響を及ぼしたという關係であるに過ぎない。

だが一方袁世碩氏は、『孔尙任年譜』[27]において、孔尙任の交遊關係について論じ、その中で余懷について言及している。それによると、兩者の交遊は單に作品上だけではなく、實際に面識があった可能性がある。その詳細は後ほど述べるとして、兩氏の考察を踏まえて以下のような假說を立ててみたい。

余懷と孔尙任との關係は、單に『板橋雜記』と『桃花扇』という作品上の關係だけではなく、まして『板橋雜記』から『桃花扇』へ、という一方的な流れだけでもなく、文學的・思想的に相互に影響を持っていた、ということである。

この假說には、二つ大きな問題點がある。一つは『桃花扇』が完成した時（一六九九）には、余懷はすでにこの世にいなかったということであり、そのために余懷が實際に『桃花扇』を見ることは不可能であったと、一見考えられそうな點があることである。もう一つは、余懷と孔尙任の年齡差である。これは孔尙任に限らず、晩年における余懷の友人は、張潮にしろ、曹寅にしろ、余懷よりかなり年下である。また、余懷が布衣の身であるのに對し、孔尙任をはじめとして淸王朝に仕える人物である。このような時代や立場の差が、交遊關係の中で何らかの阻害になったのではないかという懸念は、確かに存在する。

（三）會見の可能性―「與余澹心」―

『桃花扇』は、「本末」に「凡三易藁而書成」とあるように、三度書き直して完成したとされている。吳新雷氏の考察から考えると、その過程は大まかに分けて、（1）當時江南に赴任していた族兄孔方訓

（尙則）の實體驗を基に資料と照合（一六八五年以前）、（2）江南赴任（一六八六～一六八九）の際の實地調査（資料收集と取材）、（3）北京歸還後の填詞と最終的な調整（一六九〇年以降）の三つの時期に分けられる。そしてこの中で余懷と交流した可能性があるのは（2）の時期である。

孔尙任は一六八五年正月、國子監博士に任ぜられた。その翌年の秋、實務的な才能を見込まれ、治水工事の特派員の一人として江南に赴任する。孔尙任はその道中、及び江南に滯在中多數の文人たちと交遊し、多くの詩文を作った。これをまとめたのが『湖海集』で、その中に余懷に宛てた手紙がある。先述の袁世碩氏は、この手紙「與余澹心」に余懷と孔尙任との會見の可能性があると指摘している。

「與余澹心」（『湖海集』卷一二・戊辰（一六八八年）存稿）

從諸選本、獲觀著作、典博精密、如商周鼎彝。藻刻極細、而古色自黯然也。僕乘槎湖海、風雨勞勞。乃不敢以泥塗之人、重自菲薄。每謁諸前輩長者、搜討舊聞、用拓鄙識。實欲接踵先正、振起家學、區區附風託雅之事、幼所艷嗜者、今且自悔。然君子以文會友、未有離詠歌著作之林而問道于盲者。僕與合淝何蜀山交最久。殘臘閒、相遇於廣陵蕭寺、備述足下古道絕學。令僕納交、今蜀山已化異物、而其言猶在耳。敬以拙稿作縞紵。蓋不負故人一番慫臾之盛心耳。

諸選本より、獲て著作を觀るに、典博精密なること、商周の鼎彝の如し。藻刻極めて細かにして、古色自ら黯然たり。僕槎を湖海に乘ずるも、風雨勞勞たり。乃ち敢て泥塗の人を以て、重ねて自ら菲薄とせず。諸前輩長者に謁する每に、舊聞を搜討し、用て鄙識を拓く。實に踵を先正に接して、家學を振るひ起こさんと欲するも、區區たる附風託雅の事、幼の艷嗜する所の者にして、今且つ自ら悔やむ。然れども君子は文を以て友と會し、未だ詠歌著作の林を離れて道を盲に問ふ者有らず。僕合淝の何蜀山と交最も久し。殘臘の閒、廣陵の蕭寺に相遇ひ、備さに足下の古道絕學を述べ、僕をして納交せしむ。今蜀山已に異物と化す。而れども其言猶ほ耳に在るがごとし。敬んで拙稿を以て縞紵と作す。蓋し故人一番の慫臾の盛心に負かざらん。

この手紙で言えることは次の三點である。

第一に、孔尙任は事前に余懷の著作を讀み、それが「典博精密」で「藻刻極細」であることを評價していること。ここでいう「著作」が具體的に余懷のどの作品を指しているのかについてはよくわからない。袁世碩氏はこの著作に『板橋雜記』を含めているが、先述の通り、この時期、完成した『板橋雜記』が存在していたかどうかは不明であり、確證はない。第二に、孔尙任は「前輩の長者」たちと會見し「舊聞」を探し求めている、ということ。これは當然吳氏や袁氏の指摘する通り、『桃花扇』製作のために資料收集も含まれていると思われる。第三に、孔尙任の親しい友人であった何蜀山つまり何五雲[28]と廣陵の寺で一六八七年の暮れに會見し、余懷の話を聞いたこと。何五雲と余懷の直接的な關係を示す資料は見つからないが、余懷の次子余蘭碩の詞集『團扇詞』に跋文を書いていることから、余懷とも關係があったと推測できる。彼から余懷を紹介して貰おうと考えていたらしいが、何五雲は一六八八年の春に死去してしまった。

では袁氏の言う通り、兩者の會見は實現したのであろうか。

まず會見の時期については、袁氏は手紙を書いた同年一六八八年の初冬だとする。[29]この時期、孔尙任が余懷のいた蘇州に滯在していたことは既に青木正兒氏の指摘するところである。[30]また、翌年には余懷の

息子余賓碩と交遊がある[31]ことから、それ以前に父である余懐と會っていたことは十分想像出來る。

次に、孔尚任がどうやって余懐のことを知ったのか、ということについて考えてみると、袁氏は兩者共通の友人である冒襄の影響を指摘している[32]。冒襄と孔尚任は、一六八七年の秋、一月ほど行動を共にしており、この際、余懐のことを聞いたのではないか、と袁氏は指摘する。確かにこの時期、明末南京の諸情報に精通している人物は冒襄、余懐ぐらいしかおらず、余懐はそのような意味で貴重な人物であった。また、一六八八年の春には、孔尚任は後に『桃花扇』の製作の協力者となる顧彩とはじめて面識を持つ。余懐自身が『寄暢園聞歌記』で記述している通り、余懐は顧彩とすでに一六七〇年に面識がある。また、顧彩も余懐が戯曲に知識があることを知っていた筈である。となれば、孔尚任は顧彩からも余懐に關する情報を得ていた可能性は否定出來ない。

確證はないものの、以上の狀況證據から、兩者の會見は實現したのではないかと考えられる。

(四) 兩者の相互影響

では、兩者がこの一連の交流で得たものとはどのようなものであったのだろうか。

まず、孔尚任の場合、『板橋雜記』が兩者の會見時に完成していなかったとすれば、結果的に孔尚任が得た情報とは、直接余懐から口頭で聞いたものと、後に完成した『板橋雜記』から得たものとの、二通りがあったと想像できる。殘念ながら、現段階では『桃花扇』に則してそれを具體的に分けて指摘することはできないが、孔尚任はこの余懐から得た情報を總合し、『桃花扇』製作の一資料として、利用したのではないか。

その一つの例として、『桃花扇』第二幕を擧げる。

(見介) 老爺萬福。(末) 幾日不見、益發標緻了。這些詩篇贊的不差。(又看驚介) 呀呀、張天如、夏彝仲這班大名公、都有題贈。下官也少不的和韻一首。(小旦送筆硯介) (末把筆久吟介) 做他不過、索性藏拙、聊寫墨蘭數筆、點綴素壁罷。(小旦) 更妙。(末看壁介) 這是藍田叔畫的拳石。呀、就寫蘭於石旁、借他的襯帖也好 (畫介)。

李香君「旦那樣、ようこそ。」

楊文聰「ちょっと會わない間に、ますます綺麗になったね。どの詩もすばらしい。(また詩を見て) やあ、張天如、夏彝仲、こんな名士からも贈られているな。わたしも一首、ものせずばなるまい。」(貞麗、筆と硯をわたす。楊文聰は筆をもって、しばらく吟じている)「できないね。いっそ止めにして墨繪の蘭でも白壁にあしらってみようか。」

李貞麗「それは一段と面白うございます。」

楊文聰 (壁を見て)「これは藍田叔の畫いた石だ。うん、この石の傍らに蘭を畫いて、とりあわせにしよう。」(描く[33])

以上の場面のもとになったと考えられるのが、『板橋雜記』中卷・李香の記述である。

李香身軀短小、膚理玉色、慧俊婉轉、調咲無雙。人名之爲香扇墜。余有詩贈之曰、生小傾城是李香、懷中婀娜袖中藏、何緣十二巫峯女、夢裡偏來見楚王。武塘魏子一爲書於粉壁、貴陽楊龍友寫崇蘭詭石於左偏。時人稱爲三絕。由是香名盛於南曲。四方才士、爭一識面以爲榮。

李香身軀は短小なるも、膚理玉色、慧俊婉轉にして、調咲無雙たり。人之に名づけて香扇墜と爲す。余に詩有りて之に贈りて曰ふ、生まれながらの小傾城は是れ李香、懐中の婀娜袖中に藏す、何に緣りて十二巫峯の女、夢裡に偏へに來りて楚王に見ゆる、と。武塘の魏子一、書を粉壁に爲し、貴陽の楊龍友、崇蘭詭石を左偏に寫す。時人稱して三絕と爲す。是れより香の名南曲に盛んなり。

四方の才士、一識面を爭ひて以て榮と爲す。

以上は、當時文人世界でよく行われていた題畫、題詩を描いたシーンである。多少細かい違いはあるものの、『板橋雜記』の記述を參考にしたと考えられる。

一方の余懷はどうであろうか。殘念ながら、具體的な『桃花扇』からの影響を直接示す證據は見つからない。だが、『桃花扇』が『板橋雜記』と同樣に、長い年月をかけて完成したものであることを考えると、この時期、その『桃花扇』草稿はある程度は完成していたと考えられる。當然、余懷にも少なからず『板橋雜記』の寫眞があったと考えられる。こうした狀況下で、兩者が會見したとすれば、當然兩者間で何らかの情報交換があったとしても不思議ではない。余懷の『板橋雜記』は、一般に余懷の見聞きしたことを記した作品であるといわれている。それに間違いはないが、全てがそうであったとはいえない。例えば、余懷は吳偉業、王士禎、錢謙益など、當時の名家の詩を頻繁に引用し、當時の情景を描寫する手助けとしている。また、注目すべきは、『桃花扇』のヒロイン李香君に關する記述である。李香君に關する記述は、『板橋雜記』中二カ所に見られる。一つは前揭の中卷・李香の條、もう一つは下卷・李貞麗の條である。ここでは下卷の記述を見てみよう。

李貞麗者、李香之假母。有豪俠氣。嘗一夜博輸千金立盡。與陽羨陳定生善。香年十三、亦俠而慧。從吳人周如松受歌、玉茗堂四夢、皆能妙其音節、尤工琵琶。與雪苑侯朝宗善。閹兒阮大鋮欲納交於朝宗、香力諫止、不與通。朝宗去後、有故開府田仰以重金邀致香。香辭曰、妾不敢負侯公子也。卒不往。蓋前此閹兒恨朝宗、羅致欲殺之、朝宗跳而免。并欲殺陳定生也。定生大爲錦衣馮可宗所辱。李貞麗なる者は、李香の假母たり。豪俠の氣有り。嘗て一夜に博して千金を輸し、立ちどころに盡くす。陽羨の陳定生と善し。香は年十三にして、亦俠にして慧。吳人の周如松より歌を受け、玉茗堂の四夢、皆能く其の音節を妙とし、尤も琵琶に工なり。雪苑の侯朝宗と善し。閹兒阮大鋮朝宗と納交せんと欲するも、香力めて諫止し、與に通ぜず。朝宗去りし後、故の開府田仰重金を以て香を邀へ致す有り。香辭して曰く、妾敢て侯公子に負かざるなり、と。卒に往かず。蓋し前に此の閹兒朝宗を恨み、羅致して之を殺さんと欲するも、朝宗跳れて免る。并せて陳定生を殺さんと欲す。定生大いに錦衣の馮可宗の辱むる所となる。

羅婉徽氏が指摘するように[39]、當時、李香君に關する傳記資料としては、余懷以外には以下に引く侯方域（一六一八～一六五五）の「李姬傳」か、陳維崧（一六二五～一六八二）の『婦人集』しかなかった。

侯方域「李姬傳」（『壯悔堂文集』卷五）

李姬者名香。母曰貞麗。貞麗有豪俠氣。嘗一夜博輸千金立盡。所交接、皆當世豪傑、尤與陽羨陳貞慧善也。姬爲其養女、亦俠而慧。畧知書、能辨別士大夫賢否。張學士溥・夏吏部允彝急稱之。少風調、皎爽不羣。十三歲、從吳人周如松受歌、玉茗堂四傳奇、皆能盡其音節、尤工琵琶詞。然不輕發也。雪苑侯生、己卯來金陵與相

識。（中略）侯生去後、而故開府田仰者以金三百鍰邀姬一見。姬固却之。（以下略）

李姬なる者は名は香。母を貞麗と曰ふ。貞麗豪俠の氣有り。嘗て一夜に博して千金を輸し、立ちどころに盡くす。交接する所、皆當世の豪傑にして、尤も陽羨の陳貞慧と善し。姬は其の養女たりて、亦俠にして慧。畧ぼ書を知り、能く士大夫の賢否を辨別す。張學士溥・夏吏部允彝しばしば之を稱ふ。少くして風調あり、皎爽不羣。十三歲にして、吳人の周如松より歌を受け、玉茗堂の四傳寄、皆能く其の音節を盡くし、尤も琵琶の詞に工なり。然れども輕がるしく發せざるなり。雪苑の侯生、己卯金陵に來りて與に相識る。（中略）侯生去りて後、故の開府田仰なる者金三百鍰を以て姬を邀へて一見せんとす。姬固く之を却く。（以下略）

陳維崧『婦人集』（『香豔叢書』一集卷二）

李姬（名香）秣陵教坊女也。母曰貞麗、有俠氣。嘗一夜博輸千金立盡。姬亦俠而慧。畧知書、能辨別士大夫賢否。張學士（溥）夏吏部（允彝）尤亟稱之。十三歲從吳人周如松受歌、得其音節。然不輕發也。嘗一日者、故開府田仰以二百金鎰、邀姬一見。開府向兒事魏閹者、又姬嘗以他事獲罪阮懷寗。至是喟然曰、田公寗異於阮公乎。峻却之、卒不往。（以下注略）

李姬（名は香）は秣陵教坊の女なり。母を貞麗と曰ひ、俠氣有り。嘗て一夜に博して千金を輸し、立ちどころに盡くす。姬も亦俠にして慧。畧ぼ書を知り、能く士大夫の賢否を辨別す。張學士（溥）夏吏部（允彝）尤も亟ば之を稱ふ。十三歲にして吳人の周如松より歌を受け、其の音節を得。然れども輕がるしく發せざるなり。嘗て一日、故の開府田仰二百金鎰を以て、姬を邀へて一見せんとす。開府は向に（さきに？）魏閹に事へし者にして、又姬嘗て他事を以て罪を阮懷寗に獲。是に至りて喟然として曰く、田公は寗ぞ阮公に異ならんや、と。峻しく之を却け、卒に往かず。（以下注略）

このように、余懷の李香君に關する記述とこの兩作品とは、記述が非常に酷似していることがわかる。つまり余懷がこの兩作品を參考にして記したのはほぼ間違いない。このことから、余懷は作品制作の過程で他者の作品を資料として用いている、ということが考えられる。これは『桃花扇』の「資料と照らし合わせる」[36]という基本的な制作姿勢と共通した意識であると考えられる。言いかえれば、余懷の主題は確かに昔のよき時代への懷古、というものであるが、それは決して完全な虛構ではなくその土臺となる時代考證にも力を注いでいた、と考えられる。となれば、余懷にとって孔尙任の持つ知識・情報は大變貴重なものであったといえる。先ほど觸れたように、二人の間には、歷然とした世代や立場の差があったが、同じ文學テーマ、つまり懷古というテーマを有する者同士として、共感すべき點があったに違いない。そして、その壁を越えて情報を交換しあったことは十分想像できる。

おわりに

以上、考察してきたように、余懷は晩年も樣々な文人たちと交遊を重ね、多くの作品を著した。その記錄は決して少なくないが、雜多である反面詳細な資料は存在せず、ある程度推測することは出來るが特定づけることは今の段階では難しい。しかし、少なくとも『板橋雜記』が、本論で述べたような晩年の交遊の中で出來上がったものであるこ

とは想像に難くない。今回はその外郭について述べたが、今後は今回の考察を踏まえた上で、『板橋雜記』の内容面についても深く追求し、余懷にとって『板橋雜記』がどのような意味を持ち、また余懷の終生のテーマとなった懷古がいかなるものであったか、ということについて論じたい。

注

(1) 日本には一八世紀中頃に傳わり、明和九年(一七七二)、大阪・阪陽書坊から山崎蘭齋(生沒年不詳)訓譯、桑孝寬句讀本が出版された。後『唐土名妓傳』と改名され、明治に至るまで何度も版が繰り返された。詳しくは前田愛『成島柳北』(朝日選書・朝日新聞社・一九九〇年一二月)や『板橋雜記—唐土名妓傳』(明和九年景印本・太平書屋・一九九七年八月)の齋田作樂氏の解說を參照のこと。また、中國では清の乾隆末から嘉慶年間にかけて『續板橋雜記』(珠泉居士)『秦淮畫舫錄』(捧花生)など、遊郭と妓女を題材とする作品製作に影響を與えた。さらに、沈文熒等民國初期の外交官も、『板橋雜記』を愛好していたという記述があり(張偉雄『文人外交官の明治日本—中國初代駐日公使團の異文化體驗—』柏書房・一九九九年五月)、『板橋雜記』が後世知識人たちによく讀まれていた一端が窺える。

(2) 陶慕寧『青樓文學與中國文化』(東方出版社・一九九三年七月)。

(3) 前田愛「『板橋雜記』と『柳橋新誌』」(『國語と國文學』四一卷第三號・一九六四年)。

(4) 岩城秀夫譯注『板橋雜記・蘇州畫舫錄』(東洋文庫・平凡社・一九六四年十月)。なお、同書の解說部分は、後に「明清の香艶花史—『板橋雜記』と『蘇州畫舫錄』—」として『中國人の美意識 詩・ことば・演劇』(創文社・一九九二年三月)に再錄された。

(5) 例えば、兩氏以前には、麻生磯次『江戸文學と支那文學—近世文學の支那的原據と讀本の研究—』(三省堂・一九四六年)があり、江戸文學に影響を與えた作品の一つとして『板橋雜記』を取り上げている。また、以降は專著はなく、合山究氏が「小品文學と張潮」(九州大學『文學論輯』第二四號・一九七七年三月)において余懷を明末清初の小品作家の一人として評價し、また大木康氏が『中國遊里空間—明清秦淮妓女の世界—』(靑土社・二〇〇二年一月)において『板橋雜記』を明末南京の文人文化を知る重要な作品としてとりあげている。また、Emanuel Pastreich,The Pleasure Quarters of Edo and Nanjing as Metaphor -The Records of Yu Hiuai and Narushima Ryuhoku.(Monumenta Nipponica Volume 55・Number2,2000)では、余懷の『板橋雜記』と成島柳北の『柳橋新誌』とを比較している。

(6) 例えば、暴鴻昌「明末秦淮名妓與文人—讀余懷《板橋雜記》」(『學習與探索』一一七期・一九九八年)や李金堂「余懷與《板橋雜記》」(『天津師大學報』一三六期・一九九八年二月)があり、注釋としては李金堂校注『板橋雜記』(附『三吳遊覽志』)(明清小品叢刊・上海古籍出版社・二〇〇〇年一月)、劉如溪點評『板橋雜記』(案頭枕邊珍品系列・靑島出版社・二〇〇二年一一月)などがある。

(7) 拙論「明末清初文人研究—余懷とその交遊關係を中心として—」(大東文化大學『中國學論集』一七號・一九九八年三月)及び「余懷の初期の詩文について—甲申の變前後を中心に—」(同一九號・二〇〇〇年三月)を參照。

(8) その一環として第五四回日本中國學會大會において、晚年の交遊關係、とくに孔尙任の戲曲『桃花扇』との關係から、『板橋雜記』製作の具體的な動機や成立について考察した。

(9) 余懷の生沒年については、既に范志新「余懷生卒年考辯」(『明清小說研究』一九九〇年第四期)によって研究されており、それによると、萬

曆四四年（一六一六）七月一四日生、康熙三五年（一六九六）六月二十四日沒とする。

(10) 『莆田縣志』（莆田縣地方志編纂委員會編・中華書局・一九九四年十月）による。

(11) 現代の作家、黃裳（一九一六～）はその著『金陵五記』（江蘇古籍出版社・二〇〇〇年一月）の後記で余懷について比較的詳細な考察を行っているが、その中で方文（一六一二～一六六九）の詩「余先生六十」（『嵞山集』卷六。注に「澹心尊人」とある）を擧げ、余懷の父が大變な藏書家であり、また文學的教養を身につけた商人であった可能性を指摘している。

(12) 「冒巢民先生七十壽序」（冒襄『同人集』卷二）には、余懷が周鏡、雷縝祚の救出を計畫していたことが窺えるが、具體的なことはわからない。

(13) また、陶慕寧氏は前掲書一八七頁で余懷が復明運動に參加したと述べている。

(14) 『龔芝麓年譜』順治一四年（一六五七年）に據る。

(15) しかし、『莆田縣志』にはその根據を示していない。余懷の詩「題高澹遊嶌贈巢民移家江南圖二首」（『同人集』卷八・一六七七年作）中に、「我作梁鴻已十年」とある。また、「調寄浣溪紗四闋。已末中秋、穀梁世兄過訪還里書呈巢民長兄、即代小札」（同上・一六七九年作）にも「我住吳門已十年」とあり、遅くとも一六七〇年ごろまでには蘇州へ移ったのだろう。余懷は以前から蘇州と南京を行き來し、蘇州には寓齋もあったようであるから、いずれにせよこの頃から少しずつ蘇州に據點を移していったと考えられる。

(16) 王士禎『漁洋詩話』上卷「余澹心居建康、常賦金陵懷古詩、不減劉賓客」。なお、この時余懷が贈ったと思われる詩は、『漁洋山人感舊集』卷七に收錄されている。

(17) 彼らに關する詩については、余懷の詩集『味外軒詩輯』中に存在する。

(18) 蔣維錟『余懷著作考略』（『中華文史論叢』三九・一九八六年九月）。

(19) 原文「隱居吳門、徜徉支硎靈巖閒。徵歌選曲、有如少年。年八十餘矣」。

(20) 主な資料としては、『文獻徵存錄』卷一、『顏氏家藏尺牘』姓氏考、『漁洋山人感舊錄』卷七及び『補遺』卷三、『昭代名人尺牘小傳』卷八などがある。

(21) 李漁との關係については、既に拙論「明末清初文人研究―余懷とその交遊關係を中心として―」（前掲）でも述べているので本論では觸れないこととする。また、兩者の關係については、岡晴夫「『閑情偶寄』考（一）」（『藝文研究』五九號・一九九一年三月）及び「『閑情偶寄』考（二）」（同六〇號・一九九二年三月）や單錦珩「李漁交遊考」（『李漁全集』十九卷（浙江古籍出版社・一九九〇））に言及されている。特に、余懷は李漁の『閑情偶寄』製作に大きく關與していたことがわかる。

(22) 『清史稿』卷四八四・列傳二七一・文苑一。

(23) 尤侗『艮齋倦稿』卷一一・甲戌雜文。

(24) 吳新雷「論孔尚任《桃花扇》的創作思想」（『南京大學學報（哲學・人文・社會科學版）』一九九七年第三期）及び同氏「論《桃花扇》的創作歷程及其思想意蘊」（『明清戲曲國際檢討會論文集（下）』一九九八年八月）。

(25) 原文は吳梅、李詳校正『暖紅室彙刻傳奇』中の『桃花扇』（影印本・江蘇廣陵古籍刻印社・一九九〇年一一月）に據った。なお、王季思・蘇寰中・楊德平合注本『桃花扇』（中國古典文學讀本叢書・人民文學出版社・一九五九年初版）では、『板橋雜記』を含む七作品の名がない。

(26) 原文「余懷敍寫秦淮歌妓的《板橋雜記》、則是孔尚任汲取素材的重要文籍」

(27) 袁世碩『孔尚任年譜』「附孔尚任交遊考」（齊魯書社・一九八七年四月）。

(28) 『昭代叢書』丙集『思舊錄』卷四三によると、何五雲、字は郇公、號は蜀山。合肥の人。明經に拔かれ、泗水の縣令となった。また、孔尚任

に「哭何蜀山」という詩がある。

(29) 同上二八三頁「孔尙任曽否會見過余懷？他自己沒有明言。但我推想是有能會見過、會見的時間就在寫這封書札的那年初冬」

(30) 青木正兒「揚州に在りし日の孔尙任」(『支那學』第五號二卷・一九二九年六月)。

(31) 孔尙任『湖海集』に、余賓碩に關する詩が複數收められている。

(32) 袁氏は前掲書二八三頁にその事情について「去年秋、孔尙任駐昭陽、冒襄曽爲給孔尙任祝壽、來與孔尙任同住三十日久。兩人促膝暢談、少不了談弘光遺事、冒襄也不會不講到曽同他共過患難的余懷、及其寓居蘇州的近況」と述べている。

(33) 翻譯は岩城秀夫氏(『戲曲集』平凡社・中國古典文學大系・一九五九年)に據った。

(34) 羅婉微「歷史上的侯方域與《桃花扇》中的侯方域之比較」(『大陸雜誌』八六卷四期・一九九三年)。

(35) 『桃花扇』本末「證以諸家稗記、無弗同者。蓋實錄也」